

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介 (32) 平成 13 年 10 月 1 日

江戸時代の旅の情報誌(1)

あきさとりと うとうかいどうめいしよすえ
秋里籬島著「東海道名所図会」(291/44)

江戸時代も中頃になると庶民の生活も向上して経済的なゆとりも生まれ、遠隔地の寺社へ出かける人も多くなりました。庶民の旅が一般的になると、実際の旅行に役立つ実用的な旅行案内書が必要となり、道中記・名所記と呼ばれる旅行案内書が作られるようになりました。案内書には宿場間の距離や人馬の運送代金(駄賃)、関所、名所や名物等が記され、その多くは携帯に便利のように小型の冊子体や折本でした。

本格的な旅行案内書のはじまりは万治2(1659)年頃に浅井了以が著した『東海道名所記』で、十辺舎一九の『東海道中膝栗毛』をはじめとする、後代刊行された道中記・名所記に大きな影響を与えました。遠近道印が江戸から京都までの街道を磁針と歩測で実測し、菱川師宣が街道の風景や名所旧跡を描いた『東海道分間絵図』も元禄3(1690)年に出版され、多くの人々の心を旅へと誘いました。

江戸時代後期には名所・旧跡の案内に重点が置かれた旅の案内書が出版されるようになります。すなわち、宿場間の距離や宿場の様子に関する記述は簡潔になり、かわって名所・旧跡などの由来について資料に基づく考証を加えて記述をし、さらに写実的な挿絵を多数加えた新しい案内書で、名所図会と呼ばれます。近世中頃に出版された名所記類に比べて名所図会は大型で、旅行に携帯するというよりは、旅に出る前に机の上に置いて見所を調べたり、あるいは読み物として利用されました。

最初の名所図会といわれるのは、安永9(1780)年出版の秋里籬島著、竹原春朝斎画による『都名所図会』です。籬島の平易な文章と、浮世絵師春朝斎の実景描写の挿絵により出版当初から爆発的に売れたようで、籬島は続いて『拾遺都名所図会』(1787年刊)・『大和名所図会』(1791年刊)・『和泉名所図会』(1796年刊)・『摂津名所図会』(1796年刊)と畿内近国の名所図会を刊行、寛政9(1797)年には街道を題材に『東海道名所図会』を刊行しました。

『東海道名所図会』6巻6冊は、凡例によれば京都から江戸までの10か国を対象に、その下り道中の「名所・古跡・神社・仏院を図会」したもので、東海道を離れていれも三河国(愛知県)鳳来山・遠江国秋葉山といった名神・名刹も記述の対象としています。そして、名所図会刊行の動機については、「古人の紀行、各地の図画、道中記の類ほとんど多し。しかれども街道条古今改まりて、旧書を見るに惑う事多し」ため、実際に取材を行って現状を記載したと記しています。

全6巻のうち静岡県下の22宿は巻三から巻五にわたって記されています(本館所蔵本は巻四が欠けています)取り上げられた項目は170余、挿絵は50景描かれています。『東海道名所図会』の挿絵は竹原春朝斎を含めて30人が担当していますが、この中には後に『東海道人物志』を著す駿府在住時代の須賀鬼卵の名も見えます。

『東海道名所図会』をはじめとする名所図会は、庶民の旅の隆盛を反映して数多く作られましたが、考証に基づく記述や実景描写の挿絵などが豊富で、旅の案内書としてだけでなく地誌としても重要で、今日でも多くの研究書に引用されています。

<参考文献>

日本名所風俗図会(290.8/111/17)

静岡県史 通史編4 近世二(S209/3-3)